

# 東海の古代

## 第260号 2022年4月

会長 : 畑田寿一  
編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : toukaikodai@yahoo.co.jp  
HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

### 女王の時代があった

名古屋市 石田 泉城

#### 1 筑前を統治する女王の時代

先師・古田武彦は、『盗まれた神話』（朝日新聞社、昭和50年）において、次のように述べています。

さて、筑後山門の田油津媛は、この筑前の女王と同時代の人であった。この田油津媛の存在自体も、当時筑紫の地が“女王活躍時期”であったことをしめしている。

では、その時代はいつごろであろうか。もちろん、この説話自体から決めることはできないけれども、一つの目安がある。それは中国史書に記録された三世紀卑弥呼の存在だ。彼女は筑前を本拠として三十国に君臨していた。その三十国は九州を中心として瀬戸内海西域に及んでいたのである（『失われた九州王朝』第五章Ⅲ参照）。

したがって卑弥呼は、筑後を討伐し、はじめて筑紫一円を定めたこの神話的女王とは、もちろん同一人物ではない。はるか後代の存在である。逆にいえば、この筑後討伐の女王は、三世紀よりはるか古えの時期の人物として語り伝えられていたのである。

中 略

ではなぜ、この「相攻伐すること歴年」という乱世の中で、女王が「共立」されたのだろうか。それは、はるか過去（男王期以前）に“偉大なる名女王の時代”が倭国の歴史上に存在していたからだ。わたしには、そう思われる。その輝かしい時期の女王説話は、統合の王者として人々の間に深く広く語り伝えられ、一個の「共同幻想」と化していたのである。その「偉大なる女王」の記憶に頼って、人々は“分裂からの脱出路”を見出そうとした。そしてそれが卑弥呼と名の一女子”に託せられることとなったのである。

(103～104頁)

要するに、次の『魏志』倭人伝の記事から類推すれば、卑弥呼が共立される前の男王の時代のさらにその前に筑前に神話的女王が君臨していた時代があったと主張されています。

其國本亦以男子為王，住七八十年，倭國亂，相攻伐歴年，乃共立一女子為王，名曰卑彌呼

(中華書局版『三國志』856頁)

其の国も元はまた男子を以て王と為し七八十年をとどまるも、倭国は乱れ、相互に攻め合うことを歴年する。そこで一女子を共立して王と為す。名は卑弥呼と曰う。

(読み下しは泉城、以下同じ)

この『魏志』倭人伝の記事では、確かに「相攻防する男王の時代」が70年乃至80年続いたあとに、倭國が乱れて数年内戦があったために卑弥呼を女王として共立したと記されていますので、男王の時代以前には女王の時代があったという前提で記されていると考えられます。

卑弥呼が統治する「三十国は九州を中心として瀬戸内海西域に及んでいた」かどうかは定かではありませんが、少なくとも卑弥呼が北部九州を治めていたのは間違いなさそうですから、『魏志』倭人伝の記事を信用すれば、卑弥呼共立よりも数十年以前には、筑前を女王が統治する時代があったと思われます。

こうした女王の時代を過去に経験していたので、倭國が乱れた際には、人心を一つにまとめられるよう卑弥呼を共立したという古田説には、合点がいきます。

## 2 田油津媛の時代

ただ、筑後山門の田油津媛の時代が、果たして卑弥呼の時代を数十年遡る時代であったのかは疑問が残ります。

『日本書紀』（以下書紀と記す）によれば、田油津媛は、神功皇后の時代である、仲哀天皇即位九年三月の記事に登場します。

**丙申、轉至山門縣、則誅土蜘蛛田油津媛。時、田油津媛之兄夏羽、興軍而迎來、然聞其妹被誅而逃之。**

(仲哀天皇即位九年三月) 25日に<sup>やまとのあがた</sup>山門県へと到着し、そこで<sup>たぶらつひめ</sup>土蜘蛛の田油津媛を誅殺しました。そのときに田油津媛の兄の夏羽が軍を起こして迎えに来ましたが、妹が誅殺されたと聞き逃げたとあります。

書紀の記事が正しいとすれば、仲哀天皇即位九年には、**山門県**、すなわち筑後国山門郡、現在の福岡県みやま市のあたりを、**土蜘蛛の田油津媛**が統治していたこととなります。

それでは、仲哀天皇即位九年とはいつの時期でしょうか。

書紀は、中国史書の体裁にならって編年体で書かれており、天皇の即位年を起点として、在位中の事蹟を年代順に整然と記載していく記述形式です。したがって、書紀の記述に従い、紀元前660年の初代神武天皇から在位年数どおりに機械的に計算し西暦に置き換えることができます。



同様にして計算された『日本暦日原典』（内田正男、雄山閣出版、1992年）で確認するまでもなく、仲哀天皇が亡くなった仲哀天皇二年は、皇紀860年、西暦200年になります。年干支は<sup>こうしん</sup>庚辰です。したがって仲哀天皇即位九年は西暦207年となります。

しかし、機械的に計算した場合には、孝昭天皇や孝安天皇のように、それぞれ84年間、102年間も在位であったとする例が含まれており、総じて長期の在位年数になっており、その年代が俄に信じられるものではありません。

一方、『古事記』は、編年体ではなく、特に古い時代の天皇については、崩御年が記載されていないなど天皇の年代の情報が不完全です。

ただし、推古天皇の崩御の年干支は、記紀ともに同一であり、その西暦年が正しいと仮定すれば、そこから崩御年干支が記載されている天皇について順次遡上し、一運（60年）以内で対応する西暦年をあてはめると、崇神天皇の崩御年である戊寅年は318年となり、これが古代史上のほぼ定着した年代となっています。

同様にして求められた、仲哀天皇の崩御の年干支は、壬戌年ですから、362年と算定さ

れます。

したがって、仲哀天皇が崩御してから7年経過した仲哀天皇即位九年は、369年になろうかと思えます。

この記紀の暦年表を見れば、多少の誤差はあるものの、第十九代允恭天皇以降については、記紀それぞれの崩御年はほぼ一致しています。しかし、それ以前に遡ると次第に記紀の崩御年数が離れていきます。

この記紀の暦年表を眺めて、允恭天皇から仲哀天皇までの間で一番気になるところは、允恭天皇から仁徳天皇までは記紀で30年ほどの違いであったものが、応神天皇では一挙に記紀の差異が84年となり、仲哀天皇に至っては160年ほどの差異に広がっていることです。

その計算上の差異が生じた直接的な原因は、書紀の仁徳天皇の在位が310年から399年と89年もの期間になっているところです。

書紀では、神功皇后を卑弥呼や壺与と見立て、神功皇后の時代を卑弥呼等の時代に合わせようとして応神天皇などの在位期間を延ばしたことにあると考えられます。

『魏志』倭人伝から、邪馬壹国の卑弥呼が魏に遣使したのは239年であり、卑弥呼が没したのは248年頃ですので、書紀では、卑弥呼や壺与に該当する神功皇后の時代を200年から269年として記述したのであり、このため、記紀では応神天皇や仲哀天皇の崩御年に大きな差異が生じたと思われま。

推測するに、もし、この仁徳天皇の在位が一運少ない時期であるとして370年から399年の間とすれば、在位年数が29年となって在位年数としては比較的妥当性があるように思われます。

以上の年代感からすれば、応神天皇の時代は4世紀後半となりますから、仲哀天皇の時代は4世紀であろうと思われま。すなわち、土蜘蛛の田油津媛が統治していた時期は、4世紀となります。

#### 4 蜘蛛塚の伝承

旧・山門郡にある福岡県みやま市の老松神社には、土蜘蛛の首長である田油津媛を葬った蜘蛛塚とよばれる古墳があります。明治時代までの旧称は女王塚だったのを大正時代に皇室への付度で蜘蛛塚へと改称されています。現在は形状が確認出来ませんが、もとの古墳形状は前方後円墳とされます。

また、景行天皇の西征の時に、この地に朝廷に従わない者、葛築目くずちめがいたので、天皇は征伐して首長を葬ったところだとする伝説もあり、その時代は、仲哀天皇の時代よりも、さらに古くなります。

いずれにしても蜘蛛塚の古墳形状が前方後円墳であることを重視すれば、最も古い時代としてもせいぜい3世紀中頃ではないでしょうか。

したがって、先師・古田は、田油津媛は、卑弥呼の時代よりさらに古えであるとされますが、田油津媛の統治した時期が卑弥呼の時代より数十年も古いとは言えないようです。

天皇諡号	代	古事記		日本書紀	
		崩年干支	西暦年	崩年干支	西暦年
神武天皇	1			丙子	BC585
綏靖天皇	2			壬子	BC549
安寧天皇	3			庚寅	BC511
懿徳天皇	4			甲子	BC477
孝昭天皇	5			戊子	BC393
孝安天皇	6			庚午	BC291
孝霊天皇	7			丙戌	BC215
孝元天皇	8			癸未	BC158
開化天皇	9			癸未	BC98
崇神天皇	10	戊寅	318	辛卯	BC30
垂仁天皇	11			庚午	70
景行天皇	12			庚午	130
成務天皇	13	乙卯	355	庚午	190
仲哀天皇	14	壬戌	362	庚辰	200
神功皇后				己丑	269
応神天皇	15	甲午	394	庚午	310
仁徳天皇	16	丁卯	427	己亥	399
履中天皇	17	壬申	432	乙巳	405
反正天皇	18	丁丑	437	庚戌	410
允恭天皇	19	甲午	454	癸巳	453
安康天皇	20			丙申	456
雄略天皇	21	己巳	489	己未	479
清寧天皇	22			甲子	484
顕宗天皇	23			丁卯	487
仁賢天皇	24			戊寅	498
武烈天皇	25			丙戌	506
継体天皇	26	丁未	527	辛亥	531
安閑天皇	27	乙卯	535	乙卯	535



## 5 「天国」

卑弥呼の時代は「天国」を背景とした時代です。

一大率や一大國の名称と関わりがあります。

「一大」とは「天」の異称です。

右は、諸橋の『大漢和辞典』における「一大」の項の説明です。

**【一大】天の異称。一大の二字を合すると天の字となるからいふ。**

**〔説文〕天、顛也、至高無上、从二一大。**……

〔説文〕とは西暦100年後に完成した中国最古の字典である『説文解字』です。

天は顛（いただき、てっぺん）であり、これ以上に高いものは無いことを意味し、一と大を合わせた会意文字（複数の漢字を組み合わせて作られた文字）であると説明されています。

この一大率の檢察対象に関連する『魏志』倭人伝の記事は次のとおりです。

**始度一海，千餘里至對馬國。……（中略）……**

**又南渡一海千餘里，名曰瀚海，至一大國。……**

**又渡一海千餘里，至末廬國。……**

**東南陸行五百里，到伊都國。**

（中華書局版『三國志』856頁）

**始めて一海を渡る。千余里にして対馬國に至る。……**

**また南に一海を渡ること千余里、名を渤海と曰う。**

**一大國に至る。……**

**又一海を渡ること千余里、末廬國に至る。**

**東南に陸行すること五百里、伊都國に到る。**

〔大漢和辞典〕

〔一大〕<sup>1426</sup>天の異稱。一大の二字を合すると天の字となるからいふ。〔説文〕天、顛也、至高無上、从二一大。〔易乾鑿度〕大天氏云、一大之物自天、一塊之物自地、一炁之露名混沌。

ここに登場する対馬國は、現在の対馬であり、一大國は壱岐であり、末廬國は松浦半島であり、伊都國は糸島半島に位置するのは、大方の賢者が了承するところです。要するに、これらの地名は九州の北の海に位置する島名と半島名です。

したがって、これらの島々や半島にある国は、伊都國に常治する一大率の檢察対象です。

「一大率」は、先述のとおり「天率」の異称であるとともに、「一大國」は「天国」の異称でもあります。『三國志』の著者である陳寿は、天子に臣従を誓う身ですから、東夷の国の職名や国名を「天率」や「天国」と表記することに抵抗があり、天子に忖度してそれぞれ「一大率」「一大國」と表記したと考えられます。

このことについては、当会の元会長である林俊彦が主張されてきたこと（古田史学会報、第4号、5号、10号）であり、また、先師・古田武彦が『盗まれた神話』第十三章において主張されてきた朝鮮半島と九州との間の海域の島々をもって「天国」の領域とされたことに符号するものです。

卑弥呼が北部九州を統治していたことと関連するのが、『魏志』倭人伝の「一大率」の記事です。

**自女王國以北，特置一大率，檢察諸國，諸國畏憚之。常治伊都國，於國中有如刺史。**

（中華書局版『三國志』856頁）

**女王國より以北に特に一大率を置き、諸国を檢察す。諸國は之れを畏れ憚る。伊都國に常治す。國中に於ける刺史の如く有り。**

刺史（監察官）のような一大率が常治するのが糸島半島に在った伊都國であり、その伊都國は、女王國より北側の諸国を檢察したのですから、当然のことに女王國は、伊都國の南に位置したことになり、女王國はとりもなおさず、北部九州に位置していたのは自明です。

## 6 「あなにえや、えおとこを」

国生み神話について、先師・古田武彦は『古代に真実を求めて 第九集』（明石書店、2006年）において京都で講演した“「君が代」前”で述べています。

この話ですが、ハッキリ言いますと女性差別の神話である。これはバイブルも一緒です。女の方が蛇の誘惑に負けてリンゴを食べたから、妊婦が苦しむようになったのだ。女が悪い。まさに女性差別でバイブルは始まっている。これは地球上のいわゆる人間の歴史の中では、両者共通でありまして、三千年や五千年の違いはたいした違いはない。要するに男性優先、女性を蔑視する時代が始まって、その時期に造られた神話である。その点においてはバイブルも『古事記』『日本書紀』も共通しているわけです。

そのなかで『日本書紀』の中に、非常に優れたひとつの説話がございます。それが、『日本書紀』第十一章の神話です。（神代上、第四代、第十「一書」日本文学大系、岩波書店）。  
陰神めがみ先ず唱えていわく、「あなにえや、えおとこを」と。すなわち陽神おがみの手を握りて、遂にみとのまくはひ為夫婦して淡路島を生む。次にひるこ蛭児。

これは失敗ではない。なんと男前だと、女が言ってます。他の節を見て失敗したと覚えていたから失敗だと思っひるこていましたが、これは間違いです。そのようなことは書かれていない。「すばらしきひるこ蛭児大神がお生まれになった。淡路島に。」だから舞台は淡路島。そして女性がリードして成功した話なのです。ですから、この話は弥生時代でなく縄文時代の話である。縄文時代は言うまでもなく女性中心の時代であると、わたしは理解している。土偶のほとんどはオッパイがある。女性が中心の時代に造られた神話ですから、女性が成功した話になる。（81～82頁）

国生み神話の中の「あなにえや、えおとこを」は、確かに男性を優先する話であり、裏を返せば、その前には女性中心の時代があったことを示しています。

ただ、古田説では、淡路島が舞台の話であるとされます。

私は、国生み神話の舞台は、博多湾の淡海であると理解しています。

イザナギに関して、書紀写本には「**構幽宮於淡路之洲**」（**幽宮を淡路の洲に構りて**）、すなわち「淡路」とあるのに対して、『古事記』最古の写本である真福寺本には「**故其伊耶那岐大神者坐淡海之多賀也**」（**伊耶那岐大神は淡海之多賀に坐すなり**）、すなわち「淡海」とあります。通説では、この真福寺本の「淡海」について、近畿の近江が淡海ではなく近淡海と書かれる例などから、「淡海」は「淡路」の誤写であったとされますが、これは近畿を中心に考えたための誤りであろうと思います。真福寺本では、しっかり新しい淡海である「近淡海」と古い淡海の「淡海」を書き分けています。

国生み神話の地名は、九州と四国そして九州の島々であって、近畿ではありません。

そして、「多賀」は、福岡市南区多賀町として地名が残存します。

## 6 神話的女王

卑弥呼やその後継者の壺与が共立されていた時代までは、少なくとも古田説の「天国」を中心とする時代であり、一大率すなわち「天率」は、その「天国」を檢察する長官として力を保持していたのです。

とすると、男王が伊都國を都として統治していた時代よりも以前に女王の時代があったとすれば、それは「天国」を背景として選ばれた女王でしょう。

「天国」の初の女王は天照大神です。卑弥呼は、その天照大神の子孫としてカリスマ性をもった巫女であり、代々繋がってきた名跡襲名の巫女ですから、その「古」の神話的女王も巫女であると想像されます。しかも、誰もが認める、逆らえない後ろ盾が必要であり、それは天率（一大率）であろうと思います。

したがって、卑弥呼の時代以前の男王の時代より「古」の女王は、天照大神の子孫であった可能性が高いと考えます。

## 女性の神様と女首長

一宮市 畑田 寿一

「比咩」と言えば白山比咩神社を最初に思い出すが、なぜ白山で羊が啼くのか疑問に思っていた。しかし最近、「むなかた電子博物館」の紀要に投稿されている静岡理工科大学の矢田浩名誉教授の論文「宗像神信仰の研究（４）」を拝見してその謎が解けた。氏は「比咩」は女性の神の最高神を表し、宗像三神もかつては「比咩」と呼ばれていたとされている。思えば天照大神も卑弥呼も女性であり、女性が埋葬されたと思われる古墳も多数に及ぶ。今回は、この論考を参考にさせていただきながら、女性の権威が高かったと考えられている豊国付近の女性の神様や女首長の姿を探ってみたい。

### 1 矢田教授の説（要旨：文責筆者）

#### ① 女性の神は新羅から伝来

渡来人は香春神社に女性の神を祀っていた。これが南下して宇佐神宮になったと考えられる。

#### ② 比咩は女性の神の最高神

「延喜式」では比売の次に比咩が多い。ヤマトには殆ど無いことから九州、北陸地方独自の呼び方であった。最も多いのは白山系で阿蘇系、春日系が続く。新羅からの渡来人にとって「比咩」は最高神の象徴であった。

#### ③ 銅矛埋納文化圏との重なり

宗像三神は海人族が祀る神であり、日本海ルート以外に瀬戸内海ルートに乗って広まった。この広がりには銅矛埋納文化圏と重なる。

#### ④ 漢鏡の広がりには宇佐地方の繁栄の始まりを示す

漢鏡は最初に糸島半島付近の遺跡から多く見られていたが、弥生時代後期（3世紀）に宇佐地方で多く見られるようになる。これは宇佐地方の始まりを示しているのは無いか。

以上、矢田教授は九州北東部には女性神を祀る渡来集団が集まり、独自の文化を花開いていたとする説を述べられている。

### 2 東シナ海における祭祀

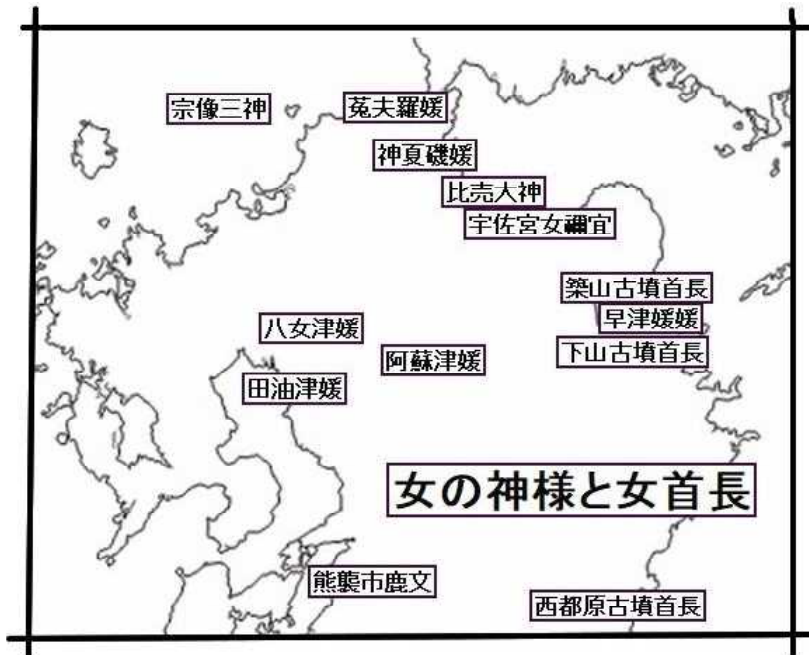
慶応大学や神奈川大学の民俗研究に拠ると、東シナ海の祭祀は形は違うが、厄を外に出す儼文化があり、死者の霊を船に乗せて来世の国に送り届ける風習や、占いを行う行為は祭祀の深層として共通であった。その中で巫（占い）は女、覡（祭り）は男が担当した。

90年程前に出版された「日本巫女史（中山太郎）」に拠れば、大正時代には日本各地で巫女が健在で、特に沖縄ではノロが信仰の中心にいた。勾玉の首飾りなど古代の信仰を色濃く現代に伝えているとしている。

以上の方々の研究成果を踏まえると、

- ① 太陽女神や天地創世の女神への崇敬が太古から存在した。
- ② 東シナ海周辺の地域には龍舟が人の霊を運んで始祖の地、つまり他界に行くという観念があった。巫女はそのための祭祀をおこなった。
- ③ 祭祀は祭り結びつき、村を挙げての行事となった。祭りの主役は男性であったが、祭祀の主役はあくまでも女性であった。
- ④ 祭祀が道教や仏教に結びつき、西王母、観音信仰を生んだ。

### 3 『日本書紀』に現れる九州地方の女首長や女性の神



#### (1) 景行天皇の九州行幸でのできごと

- (ア) 周芳の娑麼で神夏磯媛が三種の神器と白旗を掲げて従順を示した。
- (イ) 碩田国では早津媛が現れて土蜘蛛の居場所を教えた。
- (ウ) 熊襲梟帥の成敗の後、娘の市鹿文を後の火国造とした。
- (エ) 阿蘇津彦と阿蘇津媛の神が揃って天皇の前に現れた。
- (オ) 八女県には八女津媛の神がいた。

#### (2) 仲哀天皇と神功皇后の九州滞在中のできごと

- (ア) 大倉主と菟夫羅媛の神が船の進行を妨げた。
- (イ) 山門県の土蜘蛛の田油津媛を成敗した。

以上が4世紀後半に現れる女首長であるが、従来は逸話と捉えられてきた。しかし、この地域の女性像を眺めてみると幾何かの史実が含まれていると考えられる。特に兄妹で登場する部分は注目に値する。

### 4 築山古墳（大分市東部）の女首長

別府湾を望む高台にあり、5世紀中頃の構築と考えられている。位置的には四国に渡る最短距離の場所にあり海人族の停泊地であった。古墳からは4体の人骨が発見されており、その中で南棺の女性が当時の首長であったと考えられている。遺体は大量の水銀に包まれており、腕にはイモガイの貝輪が嵌められていた。北棺の女性にも同様な貝輪が嵌められており、副葬品も農機具が中心であり武器の類が存在しないことから、当時の女性の役割



を示すとする説が有力である。付近の下山古墳（臼杵市）からも男女2体の人骨が発見されており、この地方ではヒメヒコ統治が行われていた。

## 5 まとめ

月刊「考古学ジャーナル」は昨年暮れにジェンダー特集を企画した。世の中の変わり様を驚いているのは筆者だけでは無いと思われるが、特集の冒頭記事の「女性首長の役割とその変遷を追う（神戸女子大学寺沢知子教授）」では「この時期の女性首長の役割をヒメヒコ統治と捉えるのではなく、女性の方が上位と捉えるべきである。」と主張されている。少し行き過ぎの感があるような気がするが一面を捉えていると言えよう。

諏訪地方の縄文遺跡を訪ねると集落の周囲には広大な農地が広がっている。縄文時代の農業は園耕農業と呼ばれ、狩猟が中心であったとする説が有力であるが、食料の相当部分が農作物で、担い手は女性であった。女性の長老（のちの刀自）は農業ばかりでなく、一族の血が濃くならないための定期的な周辺部族との女性の交換など、内政面で活躍するとともに祭祀の主役を演じた。国の規模が郷単位であった5世紀までは国造と言えども全面的に統治していた訳ではない。

農業や航海は自然との闘いであり、その予測には一族の運命が託されている。女性は祈祷などの手段で己の意識を神懸かりの状態（トランス状態）に置き、神の言葉（託宣、神託）を伝えたりすることができると思なされてきた。済州島の神房の祭祀には整った体系、豊かな巫歌の世界があり、沖縄では聖なる森ウタキが存在した。村民は巫女の神託を聞き、皆それに従った。

以上、5世紀後半から6世紀の九州北部の統治体制を追ってみたが、倭の五王の時代でもあり、群雄割拠の中、女性を中心とした体制は意外と纏まり易かったのでは無いか。

女首長の所在地と思われる箇所を地図にしてみると不思議な事に気が付く。1つ目はその所在地が前回論考した息長氏の租の建緒組の勢力エリアと重なることであり、2つ目は呉の末裔と称する松野姫氏の伝承の残る地域との関係が推測されることである。この辺りの更なる研究を期待したい。

### 前回の例会の話題

- ・古代の宗像氏とその周辺  
東海市 大島秀雄
- ・息長系図から眺めた九州北東部の勢力と  
宇佐八幡宮 一宮市 畑田寿一
- ・九州北部の有名神社の成り立ち  
刈谷市 酒井 誠
- ・八幡様  
名古屋市 石田泉城

### 例会の予定

- 例会の予定 次回は日曜日に開催です！

- 1 日時 4月9日(土) 13時半～
  - 2 場所 名古屋市市政資料館
- 来月以降の例会  
5/15(日), 6/25(土), 7/17(日)

### 会員の投稿について

- 会報誌への投稿 (編集担当: 石田)  
toukaikodai@yahoo.co.jp

- 投稿締切り日 4月28日(木)

- 投稿文のテーマ

7世紀の隋書と聖徳太子について

### 年会費の納入のお願い

- 年会費の納入について

- 1 年会費 5,000円(会報誌等送料込み)
- 2 納入期限 2022年5月15日(例会予定日)
- 3 振込先

**募集中!**

東海古代研究会の口座を開設。新口座に振込をお願いします。名称のみ変更で、口座番号は変わりません。

- ・金融機関： ゆうちょ銀行
- ・名称： 東海古代研究会  
トウカイコダイケンキョウカイ
- ・店名： 二一八 ・店番： 218
- ・口座： 普通 1299395

ゆうちょダイレクトであれば、ゆうちょ銀行あて振替手数料は月5回まで無料です。